トリートメントデンチャーで得られた情報を複製義歯 を用いて咬合器に再現する方法

小 林 弘 樹 村 岡 博*

Reconstruction Technique Using Articulator and Treatment Denture

Hiroki Kobayashi and Hiroshi Muraoka

In fabrication of complete dentures, there is a method of adjusting the oral state using treatment dentures. After completion of adjustment, treatment dentures contain various oral information. We developed a method of reproducing as much information in treatment dentures as possible in the articulator. Duplicate dentures of treatment dentures after completion of adjustment were produced. Impression taking, face bow transfer, and bite taking were performed using this duplicate denture. This method facilitated reproduction of oral information in the articulator compared with the conventional method.

はじめに

総義歯作製時、トリートメントデンチャーを用い患者の口腔内の状態を整える方法がある^{1,2)}。調整が終了した時点で、トリートメントデンチャーには種々の口腔内情報が凝縮されている。このようにして得られたさまざまな情報を咬合器上にできるだけ多く再現する方法を考えた。

トリートメントデンチャーとは

日常臨床における総義歯作製の場合、大多数は、義歯の作り直しである。通常、総義歯の基本的な作製方法は無からの創造で、口腔内を何もない状態として義歯を作製していく。当然新義歯完成までの間、患者の口腔内には古い義歯が入っており、患者はその問題のある義歯を使用し続けなければ

ならない。そして、この旧義歯と新たに作製された新義歯とのギャップが後々問題となる場合が多い。また不適合な旧義歯のために、顎口腔系に異状をきたしている場合も少なくない。このような問題を解決するため、新義歯装着前に口腔内の環境を整えておくのがトリートメントデンチャーである。

トリートメントデンチャーにも種々あるが、著者らは、そのなかで、『テンタティブ・デンチャー法』で術式を行っている^{3,4)}。テンタティブ・デンチャー法とは、患者が来院時使用していた旧義歯を下地とし、即時重合レジン(COE社、クールライナーおよびジーシー社、テンプロン)とティシューコンディショナー(COE社、コンフォート)を使用し、試行錯誤を繰り返しながら(これをテンタティブ・デンチャーという)、患者および術者両者が満足できる方向に修正しながら理想的な義歯の形に仕上げていくというものである。最終的に調整が終了したテンタティブ・デンチャーは、審美的にも満足がいくように前歯部の修正がなさ

横浜市開業、* 東京都開業

れており、対合関係および辺縁形態も決定された状態となっている (図1)。

方 法

調整を終了したトリートメントデンチャーを複製し、これを用い咬合器上に情報を再現する。複製した義歯を用いて印象採得、フェイスボウトランスファーおよび咬合採得を行うものとする。

術 式

1. 完成したトリートメントデンチャーを、ラボ用シリコーンで印象採得する。
2. 流し込みレジンに印象のなかに流し込み、加圧状態で硬化させる。
3. 硬化後複製した義歯の (以下 DD と略す)

図1 最終的に調整の終了した、テンタティブ・デンチャーは、審美、咬合、辺縁形態が決定された状態となっている。

表面の荒研磨を行う。

4. DD 粘膜面のアンダーカットをすべて削っておく (図2, 3)。

5. 上下別々に DD を口腔内に試適し、フィットチェッカー® (ジーシー社製) による粘膜面のチェックを行う。

6. 下顎 DD の臼歯部咬合面を1層削除し、軟化したアルーワックスを盛り上げる (図4, 5)。

7. 口腔内に上下 DD を挿入し、中心位で咬合させ下顎咬合面のワックスに上顎臼歯咬頭の圧痕を付ける (仮の咬合採得) (図6)。

8. DD をトレイとし、印象採得を行う (図7~9)。

9. 上顎 DD を使用したフェイスボウトランスファーを行う。このとき下顎はテンタティブ・デンチャーを噛ませる (図10)。

10. 上顎 DD 咬合面に薄くワセリンを塗布し、口腔内に挿入しておく。

11. 下顎 DD 咬合面にバ이트レジストレーションペストを盛り、口腔内に挿入し中心位で咬合させ咬合採得を行う (図11, 12)。

12. 上下 DD にボクシングを行い作業模型を作製する (図13~15)。

13. トランスファージグを用い、上顎作業模型を咬合器に付着する (図16)。

14. 下顎作業模型を咬合器に付着する (図17, 18)。

図2, 3 レジンで複製義歯を作製する。荒研磨した後、内面のアンダーカットをすべて削っておく。

図 4 下顎複製義歯の臼歯部咬合面を1層削除しておく。

図 5 削除した咬合面にアルーワックスを盛る。

図 6 口腔内に挿入し、ワックスで仮の咬合採得を行う。

図 7 シリコン印象材で印象採得を行う。

図 8 採得された上顎印象

図 9 採得された下顎印象

結 果

複製した義歯を用いることにより、印象採得時の各個トレーなどの製作は省略することができる。また、咬合採得においても従来の蠟義歯を用

いる方法よりも簡便に術式を行うことができ、チェアタイムも短縮され患者の負担も軽減された。さらに複製された義歯が手元に残るため、その後の技工操作時にも活用することができた(図 19, 20)。

図 10 フェイスボウトランスファー

図 11 ペーストで咬合採得を行う。

図 12 口腔外に取り出された情報

図 13 ペーストを損傷しないためアルジネート印象材でボクシングを行う。

図 14 完成した上顎模型

図 15 完成した下顎模型

考 察

トリートメントデンチャーで得られる情報には、審美的要件、咬合関係、辺縁形態および粘膜面形態などがある^{3~6)}。これらを完成義歯に移行す

るため従来は、印象採得にはトリートメントデンチャーを使用するものの、その他の情報は作業模型上で作製された蠟義歯による咬合採得、審美的調整および試適により行っていた^{3,4,7,8)}。しかし、これらにこそトリートメントデンチャー自身を使用するのが一番である。ところがトリートメント

図 16 上顎作業模型付着

図 17 下顎作業模型付着

図 18 咬合器上に再現された口腔内の情報

図 19, 20 技工操作時にも活用できる。

デンチャー自身は患者が日常使用しているものなので長期間借りるわけにはいかない。そこで、調整の終了したトリートメントデンチャーを複製し、これを用いて咬合器上に情報を再現することにした。

複製義歯を用いることにより、トリートメント

デンチャーで得られた口腔内の情報を従来法よりも簡便に咬合器上に再現することができた。このことは、最終的に完成義歯にトリートメントデンチャーの情報を再現することにつながる。

参考文献

- 1) Earl, P. : Personalized Denture Procedures : Denar Corporation, 1973.
- 2) シルバーマン, S. I. (林都志夫・訳) : 有床義歯補綴の考え方と変遷. デンタルダイヤモンド社 (東京), 1988.
- 3) 村岡 博 : コンプリートデンチャーの製作. クインテッセンス出版 (東京), 1988.
- 4) 村岡 博 : 総義歯臨床 120 のポイント. 日本歯科評論社 (東京), 1993.
- 5) 小林弘樹, 村岡 博 : テンタティブ・デンチャーによるパーチセントリック決定法. 顎咬合誌, 16(3) : 193-196, 1995.
- 6) 村岡 博, 小林弘樹 : フルデンチャーの咬合様式と審美性を臨床的に解決する方法. 歯科ジャーナル, 32(6) : 683-695, 1990.
- 7) 村岡 博, 小林弘樹 : 無歯顎者の水平的顎間関係の記録法—中心位で咬合採得する臨床的意義並びにその方法. 歯科ジャーナル, 37(6) : 987-995, 1993.
- 8) 村岡 博, 小林弘樹 : 旧義歯をどう生かすか—治療義歯としての旧義歯活用法. 補綴臨床別冊 コンプリートデンチャーの臨床 : 53-59, 医歯薬出版 (東京), 1992.

別刷請求先：小林弘樹

小林歯科医院